

流産・死産繰り返す不育症

当事者女性の認知低く

岡山大調査「早く知りたかった」9割

流産や死産を繰り返す「不育症」の専門外来を受診した女性の91%が、不育症の知識を「早く知っておきたかった」と答えたとの調査結果を岡山大チームがまとめた。

不育症は妊婦の20人に1人が該当するとされるが、認知度の低さが浮き彫りとなった。

調査を担当した中塚幹也教授（生殖医学）は「診断や専門外来の受診が遅くなって後悔している人も多い。当事者になる前に学校教育などを通じ知識を持つことが重要だ」と指摘している。

チームは13日に名古屋市中で開かれる日本不育症学会学術集会で調査結果を発表する。

不育症は原因によっては投薬で対処できるうえ、不育症と知らずに流産を繰り返し精神的負担が大きくなるケースもある。早期に専門外来などを受診するのが望ましいとされる。

2025年5～8月に岡山、広島両県の専門外来を受診した女性85人が回答した。早く知っておきたかったと答えた人に、複数回答で具体的にどこで知識を得たかった

かを尋ねると「流産・死産をした病院」が57%だった。

また、53%が中学、高校、大学のいずれかの授

業や性教育で知りたかったと回答し学校教育の充実を望む声も多かった。

もっと早く不育症を疑えたら良かったと思ったことがある人は60%もあった。

は32%だった。自由記述では「流産はよくあることだと思っていた」「通っていた産婦人科で教えてもらえなかった」などがあつた。

こども家庭庁は将来の妊娠や性に関する正しい

知識を身に付けてもらう「プレコンセプションケア」の普及を掲げている。中塚教授は「医師側の情報提供が不十分なケースもあるため、プレコンセプションケアの中で知ってほしい」と話している。